高校生の友人関係に関する調査

上崎　聖（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）

指導教員　南島　永衣子

キーワード：青年期,友人関係,高校生,友人関係測定尺度

1.　緒言

青年期における人間関係は友人との関係が最も強い人間関係であり,他の年代以上に友人との関わりを求めており,自己の安定や成長に関連づけるとされてきた.しかし近年,日本の現代の青年の友人関係は全般的に「表面的」で希薄だと指摘されている（影山,1999）.現代青年の友人関係のみに着目した研究は数多くされているが,学年差や性差に重点を置いている研究は少ない.

そこで本研究では,吉岡（2001）によって作成された友人関係測定尺度を加筆修正し,高校生における友人関係を測定するとともに,学年差,性差によって平均値に違いがあるのか明らかにすることを目的とする.

2.　研究方法

調査対象は,兵庫県立I高等学校全校生徒442名を対象に2012年10月22日に調査を行った（内,回答を得られたのは1年生：男子83人,女子61人.2年生:男子65人,女子74人.3年生:男子57人,女子87人の合計427名）.吉岡（2001）の使用していた,5因子27項目からなる友人関係測定尺度を使用した.又,学年差及び性差の測定を行うため,学年及び性別についても調査を行った.

3.　結果と考察

1）学年差における因子ごとの平均値

図 1 は各学年における因子ごとの平均値を表している.1 年生は全因子合計の平均値が14.98であった.2年生は15.49で,3年生は16.05となった.このように,学年差においては,学年が上がるにつれて全因子合計の平均値が高くなった.やはり,上の学年になるほど友人と長くつき合っているため,僅かな差ではあるが平均値が高くなったと考えられる.

2）性差における因子ごとの平均値

図 2 は性差における因子ごとの平均値を表している.すべての因子において女子の方が高い値となった.特に,因子4の親密に目立った差が見られた.女子の友人関係は,一緒に過ごす状態そのものに重点を置き,集団から浮いてしまうというネガティブな結果を導き出さないための,防衛的な意味合いを持つという特徴がある.このような特徴から男子よりも女子の方が高い値となったと考えられる.

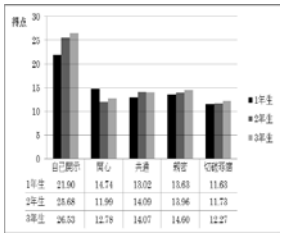

図1　各学年における因子ごとの平均値

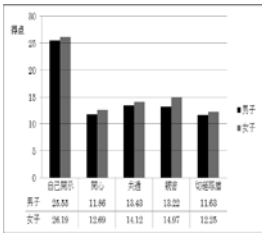

図2　性差における因子ごとの平均値

4.　結論

高校生の友人関係は学年が上がるにつれ,親密で良好なものになった.又,青年期の女子特有の親密な行動から,男子よりも女子の方がより親密であるということが示唆された.